すべてはムにつながっていく

小学生　男性

僕が今回の平和行事参加の旅に参加して一番印象に残ったことは、原爆投下直後に、言葉では表し切れないくらいの熱風が吹き荒れていたということです。

僕はその話を聞いて、肌がふるえました。もしも僕がその時生きていたら、僕は死んじゃったかもしれないし、僕がそのとき子供だったとしたら、親を亡くしたり、川に浮かぶ死体を見て、生きていくどころか心折れてしまったりしていたかもしれません。

僕は戦争が大嫌いです。これだけの悲しみがあっても、戦争をする人はいるのでしょうか。僕は、なぜ戦争をするのか不思議に思います。七十八年前の悲惨な出来事を、なぜまた起こそうとするのか本当に不思議でなりません。

ところで、「無」という言葉の意味を知っていますか。無は一般的に、存在しないこと、何も無いことという意味で使われます。今、戦争の話をしているのに、「無」という言葉が出てくることを不思議に思うかもしれません。しかし、それには理由があります。なぜなら、原子爆弾を投下する時におこるたくさんのことが、「無」という言葉につながっていくからです。

例えば、原子爆弾を投下すると、人が死んでしまいます。その時は、たくさんの人がいなくなってしまいます。他にも幸せがなくなったり、周りにあった自然が無くなったり……投下される直前に話していたことや、親との約束、明日の学校で遊ぶときの話も、全て無くなることになります。だから、「無」に繋がっていくのです。僕は、「無」になるのは怖いと思いました。そして、無くならなくてはならないのは核兵器のほうのはずだと思いました。

式典で、こども代表の小学生が話す「平和への誓い」も印象に残りました。特に、『命をつないでくれたからこそ、今、私たちは生きています。』という部分は心を打たれました。この言葉を聞いて、原子爆弾によって一瞬にして「無」になった命や幸せ、自然などを、これからも大切にしながら生きていきたいなと思いました。

広島平和記念式典の旅に参加して

５０代　男性

正直に言えば、私は普段から平和について深く考えたりしてきた訳でもなく、今まで歴史について掘り下げて考察したこともありませんでした。むしろ、どちらかと言うとあまり自分の人生には直接的な接点のない事のように感じてきた、と言った方が良いかもしれません。

そんな私を今回の旅に誘ってくれたのは、他ならぬ私の家族でした。日頃から市の広報誌に目を通す妻の横で、企画に興味を持った１０歳の息子の発案により申込みすることになったという訳です。

初めて参加した式典はとても印象深いものになりました。７８年前のその瞬間に合わせ進行する式次第、参加者それぞれの平和に対する想いが詰まっていました。８時１５分の黙禱の際には、突然降りかかった惨事に翻弄された多くの犠牲者に、少しばかり寄り添えた気がしました。また、子供代表のスピーチには心が洗われる思いでした。小学生から、穏やかにそして力強く発せられる言葉の数々を耳にして、息子達の世代に平和をもたらす為に自分は何が出来るのか、自問自答が始まったような気がします。

今回の旅を通して、息子の成長を垣間見ることもできました。参加国のリストを眺めながら、普段よく目に耳にする幾つかの国が掲載されていないことに気付き、今起きている侵略や政情不安に思いを巡らせていたようです。また、核兵器の有無に着目しながら主要国の比較もしていました。そして最も重要に思われたのは、７８年という時間の長さを意識したことでした。原爆が投下された日には二人の祖父が既に生まれていたことを改めて認識し、あの出来事がそんなに昔の話しでもないという実感を得ていたように思います。

現地に赴き実際に原爆ドームや資料館を訪れ記念式典に実際に参加することで得られた様々な気付きは、我々親子にとってとても貴重な体験になりました。

私自身、今なお世界で繰り広げられる惨状を前に、唯一の被爆国として、どのようなメッセージを発信していけば良いのか、日本人の一人として自分なりに考えていきたいと思います。また、広島を含め日本を訪れる多くの外国人の方々そして日本の未来を託すことになる子供達とともに、平和とは何か、平和を実現する為に何をすべきか、互いを思いやる気持ちに包まれながら心からの対話が実現するよう、私も世界平和の一つのピースになりたいと思います。

最後に、今回の旅を企画して下さった小金井市役所の皆様、ご一緒させて頂いた参加者の皆様、そして誘ってくれた息子と妻に感謝したいと思います。ありがとうございました。

「平和行事参加の旅」を終えて

６０代　男性

１３歳の時に広島で被爆され、現在９１歳になられた篠田恵さんは、「核兵器と人類は共存できない」とおっしゃっています。 私も、篠田恵さんの伝承者のお話や「広島平和記念資料館」を見学して「核兵器と人類は共存できない、共存すべきではない」との思いに誘われました。

では、あの忌まわしい原爆投下から７８年もの歳月が流れた今日、なぜ核兵器が存在し続けているのでしょうか。そして、現存している核兵器は、目に見えて「０」に近づきつつあるのでしょうか。

残念ながらその現実は、全く真逆であると言わざるを得ません。ロシアによるウクライナ侵攻以来、新たな「核肯定論」すら叫ばれているのが現実です。

私は、この核兵器の現状にたらしめている要因には主に２つあると考えています。

まずその１つは、いわゆる「核抑止論」にあると考えています。ある為政者は、ロシアによるウクライナ侵攻は、ウクライナが核兵器を保有していなかったことに起因すると主張しています。また、ある軍事評論家は、第二次世界大戦以降、世界大戦が起きなかったのは「核抑止」が機能していたからだ、と主張しています。これら主張に、皆さんは疑問を感じませんか。

ロシアによるウクライナ侵攻は、本当にウクライナが核兵器を保有していなかったことが主因なのでしょうか。核による威嚇を行う為政者が、現実に存在している以上､核抑止論はもはや破綻していると考えるのが自然ではないでしょうか。

過去７８年間、幸運にも世界大戦が生じなかったのも、国連を始め、世界各国の指導者たちの表舞台や舞台裏での外交や駆引きが懸命になされた結果とも言え

るのではないでしょうか。私たちには、1 日も早く「核抑止論」から脱却して、「核なき世界」という理想に向けて、具体的な行動に起こしていくことが、早急に求められているのではないでしょうか。

「核なき世界」という理想から遠ざけている要因をもう１つ挙げるとすれば、「核兵器はいかなる場合も使用してはならない」という強い理念が広島や長崎への原爆投下時からそもそも希薄だったことが挙げられると思います。アメリカが今日まで抱いている「広島、長崎への原爆投下は、結果的にさらなる多くの犠牲者を回避するためには止むを得なかった」という、いわば原爆投下肯定論をうやむやにしたまま今日に至っていることに大きな問題があるように思えてなりません。結局のところ、この曖昧さが、今日の為政者の発言にも結びついているように思われます。核兵器に１０人の命を守るためならば、８人の命を虫けらのように扱っても良い、というお墨付きを与えて良いのでしょうか。「自国の存亡の危機」という身勝手な判断で、核兵器を使用しても良いのでしょうか。

冒頭に紹介させていただいた被爆体験者の篠田恵さんは、「憎しみの心の中からは、平和は産まれない」ともおっしゃっています。私は、「アメリカを憎みなさい」と主張しているのでは決してありません。私たち日本人は、先の大戦で、中国や南北朝鮮の人々を始め、多くの国の人々の命を奪い、民族の尊厳をも奪い去り、精神的そして肉体的に大きな苦痛を与えてしまいました。私たちはこの事実を、そしてこの歴史を、あるがままに、広島や長崎で７８年前に起こった事と同じように伝承していかねばなりません。

アメリカの人々にも、「原爆投下によって戦争が早く終わった」という一瞬の言葉ではなく、広島や長崎への原爆投下によって、おびただしい数の人命が、一瞬にして失われたという事実、そして７８年経過した今日でも、多くの人々が原爆投下によって苦しんでいるという現実を直視してほしいのです。かつてオバマ

元アメリカ大統領が広島を訪れた際、おそらく心の中では　I　am　sorry　とつぶやいたことでしょう。しかし残念ながら、アメリカの人々からは　We are sorry という言葉を私は未だに聞いたことがありません。

私は、お互いの「非」を認め合って初めて、「平和」を語ることができるのではないかと思います。

８月６日の「平和への誓い」の中で「自分の思いを伝える前に、相手の気持ちを考えること、友達の良いところを見つけること」という言葉がありました。この言葉は日本、アメリカ、中国、ロシア、北朝鮮、どのような政治体制のどのような国であっても、「平和への第一歩」となる言葉のように私には思えます。

私は改めて、今回の「平和行事参加の旅」の中で「戦争がないこと＝平和」ではないことを実感いたしました。まずは、身近にある平和をつないでいくために、私ができることから行動していくことをここに誓います。「核兵器のない世界平和の実現」という理想をしっかりと頭と心に刻みながら……。

広島訪問の感想文

３０代　男性

今回の広島訪問前に想像していた内容と実際に現地に訪問した際の感じたものに大きな差分がありました。

平和記念式典での県知事と市長のストレートで強く重い言葉の数々、原爆資料館で見学した、モノ、写真、絵には生々しい内容と強いメッセージが込められていると感じました。また現地の方と話した時に、広島の小中高などの行事では君が代を歌わない、歌った記憶がないと言われていました。国家に対して被爆当時から続く念があるのであろうと推察しました。

戦争を知らない世代に生まれた自分がイメージしている戦争と原爆資料館に残されているリアルな戦争を見た時に、戦争というものがどういうものなのか根底から覆されました。

戦争をしても平和にはならない、悲しみや苦しみや恨みや憎しみを生み憎悪のマインドが強くなり残穢となる。戦争などせずに対話（コミュニケーション）を行い、すべての事を解決できればと強く思いました。対話（コミュニケーション）での平和を実現するためには、世界共通の言語を１つに決め統一することが平和に近づくのかな・・・。

お盆休みに新潟県で長岡空襲の惨禍を記録、保存、伝承していくために開設された長岡戦災資料館にも行ってきました。

広島の平和記念式典に参加して

３０代　女性

初めに行きたいと言い始めたのは夫で、自分はあまり関心がなく、付いて行ってみるかという軽い気持ちでした。

新幹線の中で、昔、修学旅行で原爆資料館に行った際、怖くてはや足で出た事を思い出し『今度はしっかり向き合ってみよう』と気持ちを改めて広島に向かいました。

賑やかな広島駅に降り立ち、足早にホテルに荷物を置くと、また広島駅にUターンして路面電車で平和記念公園に向かいました。原爆ドーム、慰霊碑など点在するモニュメントの説明を受けながら見て周り、最後に原爆資料館内の見学になりました。建物がリニューアルされたようで、原爆の凄惨さや核兵器の恐ろしさ、そして復興の歩みの流れが伝わりやすい展示になっていました。沢山の展示がある中でやはり衝撃的だったのは、原爆で亡くなった人々の遺品と当時の写真の展示でした。血が染みついた子供服、家族を心配する手紙のやりとり、呆然と立っているぼろきれの様になった人々の写真。どの展示も、まだ誰かが誰かを待っているような、何十万人という故人の想いがまだそこに留まっているようなものばかりで、悲しさを通り越しただ絶句するばかりでした。

どれだけ怖かったろう、痛かったろう。ここにある遺品の一つ一つに家族や大切な人がいて、一瞬のうちに切り裂かれてしまったのだ…。

子供の頃はただ「怖い」「見たくない」と逃げるように去った資料館でしたが、大人になり故人の想いを少しでも深く感じられた事は、この機会がなければできなかった事だと思います。

原爆ドームの横を通ると、観光で来た海外の方、デモの準備をしている人達、念仏を唱えているお坊さんの団体など、沢山の思想が溢れており、『広島のこの地』は本当に様々な人の気持ちが入り混じる特別な場所なのだ、と強く感じました。

次の日の朝、平和記念式典の会場は快晴に恵まれ、むせ返るような暑さと、セミの大合唱の中、大勢のモノトーンの人々がなだれ込むように来場していました。式典が始まると、重苦しい音楽とともに献花が始まったことに驚きました。死者を弔う優しく穏やかな音楽ではなく、「この惨劇を忘れない」と言わんばかりのズシン、と腸に響くメロディは、それまでの私の式典へのイメージを真逆のものにしました。

この平和記念式典は、ただ死者を弔う行事ではなく、今後一切、このような悲しみを作ってはならないという強く重い意思を世界に発信する日なのだ、と感じました。

広島に来る前、私は宮﨑駿監督の映画「君たちはどう生きるか」の原作になった小説をたまたま読んでいたのですが、その一節に「君自身が心から感じたことや、しみじみと心を動かされたことを、くれぐれも大切にしなくてはいけない。」という言葉があります。

今回のきっかけは夫からでしたが、このような機会を頂き、実際に見て、聞いて体験したことによって感じた想いはテレビやＳＮＳからの情報ではなく、私の実体験としてしっかりと焼き付いた思い出になりました。

そして、今回の旅で一番感じたことは、様々な人の想いがあるこの世界では、それぞれの目線での正義がある以上戦争は無くならないのかもしれない。だけど、自分の意志は決めることができるということです。平和を望む声を発信した

り、意思表示することはできるということです。少なくとも、私は、二度とこんな惨いことがどこにもあってはならないと強く思いました。

今回この平和記念式典に参加し体験することで、広島の出来事や戦争について他人事だった心が少し身近な出来事になったように感じた旅でした。「君たちはどう生きるか」の言葉のように、この心の動きを大切にしていきたいと思います。

戦後最大の戦前の今に思うこと

３０代　男性

ウクライナ侵攻が、日本経済において、私たちの生活において、大きく影響を落としている今、戦争に大きな関心が集まると同時に、平和への関心も大きく集まっていると感じています。そして、平和をただ願うだけではすまなくなってしまったと感じています。ただ、生活をしているだけでそう感じてしまうのです。

お昼のＴＶで、ネットのニュースで、目に入る新聞の見出しで、核兵器使用を示唆するようなニュースが映されています。そのニュースを目にし、耳にした時に、世界の中で一番その被害をイメージできるのは日本人なのではないか。だからこそ、そんなニュースが日常になってしまった今、平和のために何ができるのかを考えていました。

そんな矢先に、小金井市の広報で今回の平和記念式典への公募を目にし、参加しないわけにはいかなかったのです。広島へ行ってみたいといった漠然とした思いに対し、大きな理由を持って目の前にあるのだから。

平和行事参加の旅の初日。集合場所の小金井駅前同様に、突き刺すような夏の日差しの中の広島駅は周辺一帯が工事幕で覆われ都市開発が進んでいました。そんな中を進み、路面電車に乗り、原爆ドーム前に着いたが、明日の平和記念式典のためのツアーらしき方、制服を着た学生、海外からの観光客でずっと溢れているのが印象的でした。

市の方の案内のもと、爆心地の島医院から始まり、爆心地から近いからこそ残ったという原爆ドーム、平和の鐘、原爆の子の像、その間もずっと観光客で溢れていました。海外の方が、各所の説明文に目を向け、鐘を鳴らし、慣れない仕草

で手を合わせて思い願うのは、過去ではなく未来の平和に向けてであってほしいと思いながら眺めていました。

平和記念式典の会場に向かうと、リハーサルが行われており、通行規制が行われ、子供２人がハキハキとスピーチを練習し、スーツ姿の海外の方が献花をおこなっていました。そんな裏側を見ることはなんだか貴重な気がして、いよいよ明日なのだなとより強く感じたのを記憶しています。

その後、広島平和記念資料館に訪れ、伝承講話をお聞きする機会にも恵まれ、小さい頃に見た教科書の写真、大人になってから調べたネットの画像で見た世界が目の前にあることで、知った気になっていた戦争と今が繋がっていると感じることができました。

平和記念式典の当日。約２，２００席という貴重な席に座り、粛々と進む式典では、黙祷をし、首相をはじめ、子供たちのスピーチに耳を寄せ、献花をすることも叶いました。式が終わり携帯を見てみると、今回参加すること伝えていた親や友人からＴ Ｖで見ていたとメールが来ており、その関心の高さを感じるとともに、今回参加できたことに大きな意味を感じることができました。

毎年繰り返し行われているこの式典について、とりわけ戦後最大の戦前の今において平和を訴え続けたその役割は大きく、唯一核被害にあった日本にしかできない、そして核を持たないことを実行し続けている日本にしかできないことだと強く感じました。

今の日本ができることは何か、私たち一人ひとりができることは何か、こうして書いた文章が少しでもその役に立てれば嬉しいと思います。

平和の旅を終えて

３０代　女性

広島市内を訪れたのは、初めてのことだった。 私の目で見た広島は、穏やかでありながら厳かで、この場を、この風景を守るのだという覚悟を感じた。

２０２３年８月５日から６日の２日間、小金井市主催の平和行事参加の旅に参加させていただいた。１日目は平和記念公園および広島記念資料館の見学、２日目に原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式への参列と献花というスケジュールだったが、私がこの度で印象的に思ったのは、「さまざまなこども」の姿だった。

原爆ドームの周りで、海外の方に英語で原爆の悲惨さを伝えるこども。資料館の中で伝えられる、幼いながらに被曝を経験し、辛く残酷な現実に生きたこども、生きられなかったこども。平和について学びを深めようと平和行事参加の旅を共にしたこども。平和式典の中で、平和を希み、平和をつくることを宣言するこども。

私もかつて、こどもだった。私は、戦争を知らず、平和の中で生きてきたこども。私は「戦争を知らないこども」として一生を終えることができるのか。今のこども、未来のこどもに平和を渡すことができるのか。いま、これからの選択によって、未来に平和があるのかどうかがかかっている。

ちょうど、資料館の写真に写っていたこどもたちは私の祖父母と同世代のこどもたちの姿だった。「〇〇さんは爆心地から△km のところで被曝しー、」といった、一人ひとりの人生に触れる 資料の数々だった。今まで「１９４５年８月６日、広島で原爆が落とされた。」という、文字情報、歴史的事実としての認識が強かったものが、一人ひとりの尊い人生に襲いかかった悲劇であることを一気に

痛感させられた。資料館での被爆体験伝承講話でも、想像が追いつかないほどの痛ましい情景を私たちに伝えてくださった。

私が当たり前のように享受していた平和は、かつて戦争を経験し、辛い思いを抱え、もう２度とこんな経験はしたくない、誰にもさせたくないと、揺るぎない覚悟を持って生きてきた 「過去のこどもたち」が築きあげてきたものだった。

そんな「過去のこどもたち」に恥ずかしくない、これからの未来を選択していきたい。

人を傷つける先に平和はないということ。人を抑圧し、対話を持たず、私欲のための選択は破壊を生むということ。武力による平和は存在しないということ。

平和は、そこにあるのではなく、与えてもらうものでもなく、私たちのたゆまぬ努力により成り立つものである。戦争を知らないこどもである私たちだからこそ伝えられる平和もあるはずだ。

最後に。小学校から高校までを千葉で過ごした私は、平和教育というものをそう多く受けてきた、という自覚が残念ながらなかった。平和行事参加後、簡単に調べてみたところ、やはり西日本よりも東日本における平和教育は 充実させられていないということがわかった。

そんな中であったが、今回、小金井市の呼びかけによって平和行事参加の旅に参加した、ということを職場で話したところ、小金井出身の同僚から「そういえば、昔からあったなぁ。 周辺の市がそういった取り組みをなくしている中でも小金井は続けていたな。」といった言葉をもらった。大人になった今も、記憶に残る小金井の平和教育への意識の高さはとても誇るべきものだと思う。今後もここ東京・小金井から平和を祈念する取り組みをぜひ続けてほしいと心から願っている。